View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

蘇軾詩注解（二十六）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原田直枝
西岡淳
（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

蔣穎叔に次韻す　二首（一九二八「景霊宮に扈従す」、一九二九「凝祥池」）

王晉卿　詩を示して海石を奪わんと欲す。銭穆父・王仲至・蔣穎叔　皆な次韻す。穆・至の二公は以て許す可からずと為す。独り穎叔のみ然らず。今日　穎叔訪わる、親ら此の石の妙を睹て、遂に前語を悔やむ。僕以為らく、晉卿　豈に終に閉じて予えざる可き者ならんや。若し能く韓幹が二散馬を以て之に易えば、蓋し許す可

一

きなり、と。復た前韻に次す（一九三一）
軾、石を以て画に易えんと欲す。晉卿は之を難む。穆父は兼ねて二物を取らんと欲し、穎叔は画を焚き石を砕かんと欲す。乃ち復た前韻に次して幷わせて二詩の意を解す（一九三二）
生日に劉景文が古画の松鶴を以て寿を為して且つ佳篇を貺うを蒙る。次韻して謝を為す（一九三三）
程徳孺　海中の柏石を恵み、兼ねて佳篇を辱くす。輒ち復た和して謝す（一九三四）
秦少游が韻に次ぎて、姚安世に贈る（一九三五）
丹元姚先生が韻に次ぐ　二首（一九三六・一九三七）

一九二八・一九二九（施三三―一二・一三）

次韻蔣穎叔二首
蔣穎叔に次韻す　二首

一九二八（施三三―一二）

扈従景霊宮
景霊宮に扈従す

1 道人幽夢曉初還　道人の幽夢　暁に初めて還り
2 已覺笙簫下月壇　已に覚ゆ　笙簫の月壇を下るを
3 風伯前驅清宿霧　風伯　前駆して宿霧を清め
4 祝融驂乘破朝寒　祝融　驂乗して朝寒を破る
5 英姿連璧從多士　英姿　連璧　多士を従え

6　妙句鏘金和八鑾　　妙句　鏘金　八鑾を和す
7　已向詞臣得頗牧*　　已に詞臣に向いて頗・牧を得たり
8　路人莫作老儒看　　路人　老儒と作して看る莫かれ

〔原注〕時穎叔新除熙河帥（時に穎叔　新たに熙河の帥に除せらる）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。兵部尚書・侍読として都の開封に在った。

○蔣穎叔　蔣之奇のこと。穎叔はその字。「蔣穎叔・銭穆父が景霊宮に従駕するに次韻す　二首」その一（『蘇軾詩注解（二十四）』所収）の注を参照。○景霊宮　宋朝帝室の祖先を祭る道観。前掲詩の注を参照。『続資治通鑑長編』元祐七年十一月甲辰（二十四日）の条に、「景霊宮・万寿観に詣りて恭謝す」とある。○扈従　天子の乗りものに付き従うこと。天子を直接には指さず、敬意を表現する。

1○道人　道教の悟りをひらいた人。万寿観（詩題の注を参照）の道士に擬するかもしれない。○幽夢　おぼろげな夢。「喬太博が左蔵に換えられて欽州に知たりと聞き、詩を以て招飲す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊八〇頁）を参照。一句は、現実に道人が夢から覚めたことを意味するのではなく、夜明けの頃合いに至ったことをいうための修辞的表現であろう。2○笙簫　笙・簫ともに竹製の管楽器の名。笙は十九管または十三管、簫は二十四管までさまざまな種類がある。○月壇　天子が月を祭る祭壇。『宋史』礼志六「朝日夕月」には、「夕月壇」の名でみえる。3○風伯一句　風伯は、風の神。『楚辞』屈原「遠遊」に、「風伯は余が為に先駆し、氛埃辟きて清涼なり」とある。前駆は、行列の先払い。『詩経』衛風「伯兮」に、「伯や殳を執り、王が前駆と為る」とある。宿霧は、前夜からかかっていた霧。唐・太宗「雨を詠ず」詩（『全唐詩』巻一）に、「新流　旧澗に添い、宿霧　朝煙足る」とある。4○祝融一句　祝融は、火を司る神の名。「息壤の詩　幷びに叙」の注（『蘇東坡詩集』第一冊一五五頁）を参照。驂乗は、そえのり。『春秋左氏伝』文公十八年に、「閎職の妻を納れて、職をして驂乗たらしむ」とあり、杜預の注に、「驂乗は、陪乗なり」とある。5○英姿　勇ましい姿。○連璧　『荘子』列御寇篇に、「日月を以て連璧と為す」とある。もとは一対の玉の

三

四

意だが、すぐれた人が並ぶことをもいう。『世説新語』容止篇に「潘安仁（岳）・夏侯湛、並びに美容有り、喜んで同行す。時人　之を連璧と謂う」とある。○多士　多くの人材。『詩経』大雅（文王の什）「文王」に「済済たる多士、文王　以て寧からん」とある。6○鏘金　よい音を立てる金石（鐘や玉など）のこと。韓愈「荊潭唱和詩の序」（『韓昌黎集』巻二〇）に、「鏘鏘として金石を発し、幽眇にして鬼神を感ぜしむ」とある。○八鑾　鑾は、天子の馬車を引く馬のくつわに付ける鈴で、四頭で計八つある。『詩経』小雅（蕩の什）「烝民」に、「四牡　彭彭たり、八鸞　鏘鏘たり」とある。7○已向一句　詞臣は、詩文の才を以て天子に仕える臣下。頗牧は、戦国時代の趙の名将、廉頗と李牧のことで、ともに『史記』に伝がある。唐の大中年間に党項が河西を侵したとき、時の天子宣宗は翰林学士の畢誠に辺事について問うたところ、古今の例を引いて詳細に対策を答えたので、悦んで「吾れ将に能く帥たる者を択ばんとするに、孰か頗牧の吾が禁署に在るを謂わんや、卿　朕が為に行かんか」と言った（『新唐書』畢誠伝）。この故事は、蔣之奇がこのとき知熙州に任命されて、西夏と対峙する熙州（甘粛省）に赴任せんとしていたこと（原注、および『続資治通鑑長編』元祐七年十月乙亥の条を参照）とよく符合する。8○路人　みちゆく人。蔣之奇が熙州に赴く途上で出会うはずの人々のこと。○〔原注〕　7句の注を参照。

（万寿観の）道人が明け方のかそけき夢から覚めるころには、笙簫の調べが月壇より下って、祭儀がすでに終わったことが知られる。先駆けをなす風伯が昨夜からの霧をはらい清め、副え乗りを務める祝融が早朝の寒気を破って行く。

勇姿を連ねて付きしたがう済済たる多士。その一人である君の詩が奏でる金石の音色が鳳駕の鈴の音に重なる。文藻の臣であるうえに名将廉頗・李牧の才を認められたのだから、道行く人もこの方を、ただ老成した儒者と見なすだけではいけないよ。

一九二八（施三三―一二）

凝祥池

凝祥池

1 似知金馬客　知るに似たり　金馬の客の
2 時夢碧鷄坊　時に碧鷄坊を夢みるを
3 冰雪消殘臘　氷雪　残臘に消え
4 煙波寫故鄕　煙波　故郷を写す
5 鳴鑾自容與　鳴鑾　自ら容与たり
6 立馬久回翔　立馬　久しく回翔す
7 乞與三韓使　三韓の使に乞与して
8 新圖到樂浪*　新図　楽浪に到らん

〔原注〕時高麗使在都下、毎至勝境、輒圖畫以歸（時に高麗の使　都下に在り、勝境に至る毎に、輒ち図画して以て帰る）

○凝祥池　開封の御園にあった池の名。『汴京遺跡志』巻一〇に、「会霊観は、南薫門外の東北、普済水の西北に在り。……観の南に奉霊園有り、観の東に凝祥池有り」とある。凝祥の名は、大中祥符八年五月の詔により賜ったという（同書の引く『宋朝会要』）。また、『続資治通鑑長編』元祐七年十一月乙巳（二十五日）の条に、「凝祥池・中太乙宮・集禧観・大相国寺に幸す」とある。

1○金馬客　金馬は、漢代の未央宮の門の名。もとは魯班門といったが、武帝のとき傍らに銅馬が置かれたことによっ

五

六

て金馬門と称された（『後漢書』馬援伝）。のち、文学の士が控える官署をさす。揚雄「解嘲」（『文選』巻四五）に、「公孫は業を金馬に創め、驃騎は跡を祁連に発す」とある。金馬の客とは、蘇軾自身のこと。2○碧鶏　成都の坊（街区）の名。前蜀の王氏の宮園が置かれた（周輝『清波雑志』「別志」巻上）。杜甫「西郊」詩（『杜詩詳注』巻九）に、「時に碧鶏坊を出で、西郊より草堂に向かう」とある。3○残臘　冬の終わり。臘は、臘月。唐・李頻「湘口にて友人を送る」詩（『全唐詩』巻五八七）に、「零落　梅花　残臘を過ぐ、故園　帰りて酔わば新年に及ばん」とある。5○鳴鑾　鑾は、馬車を引く馬のくつわに付ける鈴。その鈴を鳴らすのが鳴鑾で、天子や貴族の道行きをいう。容与は、ゆったりしたさま。班固「西都の賦」（『文選』巻一）に、「大路　鑾を鳴らし、容与として徘徊す」とある。6○回翔　飛びまわる。ここでは、あちこち見て回ること。『楚辞』九歌「大司命」（屈原）に、「君　廻翔して以て下れば、空桑を踰えて女に従わん」とある（空桑は山の名）。7○三韓　馬韓・弁韓・辰韓のことで、高麗をさす。作品番号一九二三の詩（『蘇軾詩注解（二十五）』所収）の注を参照。○乞与　与える。乞も与える意。8○楽浪　漢の武帝の時に朝鮮に置かれた郡名。『史記』朝鮮伝に、「故を以て遂に朝鮮を定め、四郡を為む」とあり、集解に「真番・臨屯・楽浪・玄菟なり」とある。○〔原注〕　7・8句の注を参照。

ずっと朝廷に仕えているこのわたしが、時に碧鶏坊を夢みることを（造化主は）知っているかのようだ。この臘月の終わりに（天子の徳がもたらした暖気で）雪と氷が消えて、水面がもやに煙る眺めはわが故郷さながら。その景色に鳳駕の鈴の音もおのずとゆったりとして、付きしたがう人々も馬をとどめて見てまわる。三韓からの使者にこの凝祥池の眺めを見せてやったなら、さっそく絵に描いて楽浪の地に持ち帰ることだろう。

（担当　西岡　淳）

一九三一（施三三―一五）

王晉卿示詩欲奪海石錢穆父王仲至蔣穎叔皆次韻穆至二公以爲不可許獨穎叔不然今日穎叔見訪親睹此石

之妙遂悔前語僕以爲晉卿豈可終閉不予者若能以韓幹二散馬易之者蓋可許也復次前韻

王晉卿　詩を示して海石を奪わんと欲す。銭穆父・王仲至・蔣穎叔皆な次韻す。穆・至の二公は以て許す可からずと為す。独り穎叔のみ然らず。今日　穎叔訪わる、親ら此の石の妙を睹て、遂に前語を悔やむ。僕以為らく、晉卿　豈に終に閉じて予えざる可き者ならんや。若し能く韓幹が二散馬を以て之に易えば、蓋し許す可きなり、と。復た前韻に次す。

1 相如有家山　　相如　家山有り
2 縹緲在眉綠　　縹緲として眉緑に在り
3 誰云千里遠　　誰か云う　千里遠し、と
4 寄此一顰足　　此の一顰を寄すれば足れり
5 平生錦繡腸　　平生　錦繡の腸
6 早歲藜莧腹　　早歲　藜莧の腹
7 從教四壁空　　従教れ　四壁の空しきを
8 未遣兩峯蹙　　未だ両峰をして蹙せしめず
9 吾今況衰病　　吾れ今況んや衰病して
10 義不忘樵牧　　義　樵牧を忘れざるをや
11 逝將仇池石　　逝きて将に仇池石もて
12 歸泝岷山瀆　　帰って岷山の瀆を泝らんとす
13 守子不貪寶　　子の貪らざるの宝を守りて

14 完我無瑕玉　我が瑕無きの玉を完うす
15 故人詩相戒　故人　詩もて相戒む
16 妙語予所伏　妙語　予の伏する所なり
17 一篇獨異論　一篇　独り論を異にし
18 三占從兩卜　三占　両卜に従う
19 君家畫可數　君が家　画は数う可し
20 天驥紛相逐　天驥　紛として相逐う
21 風騣掠原野　風騣　原野を掠め
22 電尾捎澗谷　電尾　澗谷を捎う
23 君如許相易　君　如し相易うるを許さば
24 是亦我所欲　是れも亦た我が欲する所なり
25 今朝安西守　今朝　安西の守
26 來聽陽關曲　来たって陽関の曲を聴く
27 勸我留此峯　我に勧めて此の峰を留めしむ
28 他日來不速　他日　速かざるに来たらん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○王晉卿　王詵のこと。海石は仇池石のこと。この石をめぐる一件については、作品番号一九二六「僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり、王晉卿　小詩を以て借りて観る、意は奪わんとするに在り……」の注（『蘇軾詩注解（二十五）』）

を参照。○銭穆父・王仲至・蔣穎叔　作品番号一九一九「「西湖の月下に琴を聴く」に和せらる」詩の注（『蘇軾詩注解（二十五）』）を参照。この三人が和した詩は伝わらない。○韓幹二散馬　韓幹は、唐代の画家。長安（陝西省）の人。玄宗に仕え、特に馬を描くのに優れた。散馬は、気ままに歩む馬。南朝斉・王融「虜に給うを議する書疏」（『南斉書』巻四七）に、「春草に水は生じ、散馬の適くを阻む。秋風に木（の葉）は落ち、駆禽の歓びを絶つ」とある。○前韻　前掲「僕が蔵する所の仇池石……」詩の韻。

12○相如・縹緲二句　前漢の司馬相如は成都（四川省）の人で賦に優れ、武帝に愛された。卓文君は富豪・卓王孫の娘で文学に秀で、司馬相如と再婚した。文君は美しく、「眉色は遠山を望むが如く」（『西京雑記』巻二）という。家山は、ふるさとの山。唐・銭起「李棲桐の道挙に第に擢んでられて郷に還りて省侍するを送る」詩（『全唐詩』巻二三七）に、「蓮舟　宿浦に同じく、柳岸　家山に向かう」とある。縹緲は、遠くはるかに見えるさま。緲の字は、眇・渺とも書く。木華「海の賦」（『文選』巻一二）に、「群仙　縹眇として、玉を清涯に餐らう」とある。4○一顰　顰は、ひそめる。まゆにしわを寄せる。嚬とも書く。『韓非子』内儲説上篇に、「吾れ聞く、明主の一嚬一笑を愛しむは、嚬するには為に嚬する有りて、笑うには為に笑う有ればなり、と」とある。5○錦繡腸　美しい詩文を身中に蔵することのたとえ。錦繡は、にしきと美しい絹織物。李白「冬日、龍門に於て従弟の京兆参軍令問が淮南に之きて覲省するを送る序」（『李太白全集』巻二七）に、「兄が心肝五蔵（臓）、皆な錦繡か。然らずんば、何ぞ口を開けば文を成し、翰を揮えば霧と散ずるや」とある。6○藜莧腹　藜莧は、アカザとヒユ。粗末な食物。韓愈「崔十六少府、伊陽を摂し、詩及び書を以て投ぜらる。因って酬ゆ　三十韻」詩（『韓昌黎集』巻四）に、「三年　国子の師、腸肚　藜莧に習う」とある。78○従教・未遣二句　四壁空は、四方に壁があるだけで、家の中に家具も何もないこと。貧しい住まいをいう。『史記』司馬相如伝に、「文君　夜亡げて相如に奔る。相如乃ち与に馳せて成都に帰る。家居徒だ四壁立つのみ」とある。杜甫「百憂集行」（『杜詩詳注』巻一〇）に、「門に入れば旧に依って四壁空し、老妻　我を覩て顔色同じ」とある。両峰は、文君の眉を指す。蹙は、しわを寄せること。10○樵牧　きこりや牧童。『晉書』宣帝紀に、「賊は水を恃み、樵牧自若たり」とある。11○逝将　『詩経』魏風・碩鼠に、「逝きて将に女を去り、彼の楽土に適かんと

す」とある。12〇帰泝一句　泝は、さかのぼる。流れに逆らって進むこと。岷山瀆は、岷山（四川省）から流れてくる川のこと。13〇守子一句　不貪宝は、貪らないことを尊ぶこと。『春秋左氏伝』襄公十五年に、「宋人　玉を得る或り、諸を子罕に献ず。子罕受けず。玉を献ずる者曰く、以て玉人に示せしに、玉人以て宝と為せり。故に敢えて之を献ず、と。子罕曰く、我は貪らざるを以て宝と為し、爾は玉を以て宝と為す。若し以て我に与えば、皆な宝を喪うなり。人びと其の宝を有するに若かず、と」とある。14〇完我一句　いわゆる「璧を完うして還る」の故事に拠る（『史記』廉頗藺相如伝）。秦の昭王は趙の宝である「和氏の璧」を、十五の城と交換したいと要求した。藺相如は趙の恵文王に、城が手に入らない場合は、和氏の璧を無事に（完）持ち帰ると約束して秦に向った。秦王に城を与える意思がないと見てとった藺相如は、秦王に「璧に瑕がある」と言って璧を取り返し、秦王の非を責める一方で、密かに従者に命じて和氏の璧を趙に持ち帰らせた。ここでは仇池石を守って譲らない意。15〇故人一句　戒は、いましめること。銭穆父・王仲至の次韻した詩を指す。16〇予所伏　私が納得のいくところ。韓愈「石鼎聯句詩の序」（『韓昌黎集』巻二一）に、「尊師は世人に非ず。某伏しぬ」とある。17 18〇一篇・三占二句　一篇は、蔣穎叔の次韻した詩を指す。三占一句は、三人の意見があり、そのうちの二人の意に従うこと。『尚書』洪範に、「三人占えば、則ち二人の言に従う」とある。20〇天驥　一日に千里を行く駿馬。「蔡冠卿の饒州に知たるを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二二三頁）を参照。21〇風騣　騣は、馬のたてがみ。風騣は、たてがみをなびかせて馬が疾走するさま。騣の字は、鬃とも書く。柳宗元の作とされる『龍城録』巻上「寧王の画ける馬　化し去る」によれば、寧王は馬を描くのにすぐれ、その作「六馬衮（滾）塵図」の玉面花驄という馬を玄宗は特に好んで、「織悉にして備わらざる無し、風鬃霧鬣、信に偉如たり」と絶賛したという。22〇電尾　いなずま。馬の尾が稲光のように見えることをいう。唐・韓偓「暴雨」詩（『全唐詩』巻六八一）に、「電尾　黒雲を焼き、雨脚　銀線を飛ばす」とある。ここでは速く駆けている馬の尾のさまをいう。24〇是亦一句　『孟子』告子上篇に、「魚は我が欲する所なり、熊掌も亦た我が欲する所なり。二者兼ぬることを得可からずんば、魚を舎てて熊掌を取る者なり」とある。25〇安西守　安西は、今のトルファン（新疆）の西。唐代に安西都護府が置かれた。このとき蔣之奇（穎叔）が知熙州に任命された（『続資治通鑑長編』元祐七年十

月乙亥の条を参照）。宋の熙州は、唐代には安西都護府に属した。26〇陽関曲　送別の詩をいう。唐・王維の「元二の安西に使するを送る」詩（『王右丞集』巻一四）に「君に勧む　更に尽くせ　一杯の酒、西のかた陽関を出ずれば故人無からん」とある。「渭城の曲」ともいう。27〇勧我一句　詩題の「今日穎叔訪わる、親ら此の石の妙を睹て、遂に前語を悔やむ」を指す。28〇来不速　速は、まねくこと。『周易』需卦の爻辞に、「上六　穴に入る。速かざるの客三人の来たる有り、之を敬すれば終には吉」とあり、孔穎達の疏に「速は、召なり」とある。

司馬相如の家には故郷の山があり、それは舞い上がったような卓文君の美しい眉にこそあるのだ。誰がそれは千里の遠きにあると言うだろうか、その眉を「故郷の山」にことよせればよいのだ。相如は平生詩文の才に長じていたが、若いころは粗末なものばかり食べていた。赤貧洗うが如き暮らしも気にかけず、文君に眉をひそめさせたことはなかった。

まして私はいま老い衰えて病気がちで、故郷の山に帰ってき山中の人の暮らしをすべきだといつも思っているのだから、この（文君の眉と同じく大事な）仇池石を必ずたずさえて、岷山から流れてくる川をさかのぼって帰ってゆこう。

（そうすれば）君はむさぼらない心を宝として守り通すことができるし、（私は）無瑕のままの玉を故郷へ持ち帰れるだろう。銭穆父と王仲至から詩で戒めさとされて、その巧みな言い回しにはなるほどと思った。蔣潁叔だけが異議を立てたが、三人のうち二人の多数に従うべきだろうと思われる。

尊宅には立派な絵が数多くおありで、駿馬が入り乱れて駆けていることだろう。たてがみが風になびくように原野を掠めて過ぎ、尾が稲妻のように谷川をはらってゆく。君がもし石との交換を認めるならば、それも私の望むやり取りだ。

今日は安西の太守（穎叔）が熙州へ赴任しようと、「陽関の曲」を聴きにやって来た。この石を残してくれ

一一

るよう勧められたが、それは気が向いたときにいつでも見に来たいからということだとか。

（担当　蔡　毅）

一九三一（施注三三―一六）

軾欲以石易畫晉卿難之穆父欲兼取二物穎叔欲焚畫碎石乃復次前韻幷解二詩之意

軾　石を以て画に易えんと欲す。晉卿は之を難む。穆父は兼ねて二物を取らんと欲し、穎叔は画を焚き石を砕かんと欲す。乃ち復た前韻に次して幷わせて二詩の意を解す。

1 春冰無眞堅　　春氷　真の堅さ無く
2 霜葉失故綠　　霜葉　故の緑を失う
3 鶚疑鵬萬里　　鶚は鵬の万里を疑い
4 蚿笑夔一足　　蚿は夔の一足を笑う
5 二豪爭攘袂　　二豪　争って袂を攘い
6 先生一捧腹　　先生　一り腹を捧う
7 明鏡既無臺　　明鏡　既に台無し
8 淨瓶何用蹙*　　浄瓶　何ぞ蹙るを用いん
9 盆山不可隱　　盆山は隠る可からず
10 畫馬無由牧　　画馬は牧するに由無し
11 聊將置庭宇　　聊か将に庭宇に置き

12 何必棄溝瀆　何ぞ必ずしも溝瀆に棄てん
13 焚寶眞愛寶　宝を焚くは真に宝を愛す
14 碎玉未忘玉　玉を砕くは未だ玉を忘れず
15 久知公子賢　久しく知る　公子の賢なるを
16 出語耆年伏　語を出だせば耆年伏す
17 欲觀轉物妙　物を転ずる妙を観んと欲し
18 故以求馬卜　故に馬を求むるを以て卜す
19 維摩既復捨　維摩　既に復た捨つ
20 天女還相逐　天女　還た相逐う
21 授之無盡燈　之に無尽燈を授けて
22 照此久幽谷　此の久幽の谷を照らさしむ
23 定心無一物　定心　一物無し
24 法樂勝五欲　法楽　五欲に勝る
25 三峨吾鄉里　三峨は吾が郷里
26 萬馬君部曲　万馬は君が部曲
27 臥雲行歸休　雲に臥して行ゆく帰休せん
28 破賊見神速**　賊を破ること神速なるを見ん

〔原注〕古蹴蹙通（古は蹴と蹙通ず）

〔**〕晉卿將種、常有此志（晉卿は将種なり、常に此の志有り）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○石　程之元から贈られた石。「僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり……」詩（『蘇軾詩注解（二十五）』）の詩題の注ならびに原注を参照。また本注解に収める「王晉卿　詩を示して海石を奪わんと欲す。……」詩、および「双石」詩（『合注』巻三五。詩人選集『蘇軾』下・五〇頁）も参照。○画　王晉卿が蔵する韓幹の馬の画。上述の「王晉卿詩を示して海石を奪わんと欲す。……」詩を参照。○晉卿　王詵のこと。晉卿はその字。「王晉卿　煙江畳嶂図を作す。……」詩（『蘇軾詩注解（一）』）の詩題の注を参照。○穆父　銭勰のこと。穆父はその字。「銭越州に次韻す」（『蘇軾詩注解（三）』）の詩題の注を参照。○穎叔　蔣之奇のこと。穎叔はその字。「蔣穎叔・銭穆父が景霊宮に従駕するに次韻す　二首」（『蘇軾詩注解（二十四）』）の詩題の注を参照。○前韻　上述の「僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり……」詩の韻字をいう。○二詩　宋本では三詩に作る。二詩とは、銭勰と蔣之奇の詩をいう。

12○春氷・霜葉二句　氷は春になると本来の堅さを無くし、葉は霜が降りるとそれまで持っていた緑色を失う。二句は形あるものの移ろいやすいことをいう。『周易』坤卦の爻辞に「初六　霜を履みて堅氷至る」とあり、その象に「霜を履みて堅氷とは、陰の始めて凝るなり。其の道を馴致すれば、堅氷に至るなり」とある。34○鶚疑・蚿笑二句　鶚は鵬が万里の高みに上がる意味を理解せず、蚿は夔が一足であることを笑う。夔は、『山海経』大荒東経などになどにみえる一本足の動物。二句は大小多寡それぞれに分が定まっていることに思いが至らないことをいう。『荘子』逍遙遊篇に「鳥有り、其の名を鵬と為す。背は泰山の如く、翼は垂天の雲の如し。扶揺に搏ち、羊角して上がる者九万里、雲気を絶え、青天を負いて、然る後に南を図り、且に南冥に適かんとするなり。斥鷃、之を笑いて曰く、「彼れ且に奚くに適かんとするや。我れ騰躍して上がるも、数仞に過ぎずして下り、蓬蒿の間に翺翔す。此れ亦た飛ぶことの至りなり。而るに彼れ且に奚くに適かんとするや」と。此れ大小の弁なり」とある。また、『荘子』秋水篇に「夔蚿に謂いて曰く、「吾れ一足を以て跊踔して行く。予れ如ぶ無し。今　子の万足を使う、独り奈何」と。蚿曰く、「然らず。子は夫の唾する者を見ざるか。噴けば則ち大なる者は珠の如く、小なる者は霧の如し。雑りて下る者、勝げて数う可からざるなり。今　予れ吾が天機を動かして其の然る所以を知らず」と」とある。56○二豪・先生二句　二

豪は、詩題にいう二詩の作者である銭勰・蔣之奇のこと。攘袂は、たもとをまくって腕を突き出すこと。奮起するさまをいう。先生は蘇軾自身のこと。劉怜「酒徳の頌」（『文選』巻四七）に「貴介公子・搢紳処士有り、吾が風声を聞き、其の所以を議す。乃ち袂を奮い襟を攘い、目を怒らせて歯を切る。礼法を陳説し、是非　鋒起す。先生　是に於て方に罍を捧げ槽を承け、杯を銜み醪を漱ぐ。……二豪　側に侍す、焉くんぞ蜾蠃の螟蛉に与するに如かん」とある。捧腹は、腹をかかえること。大笑いするさま。『史記』日者伝に、市場で卜いをしていた司馬季主が、人材を求めて訪ねてきた賈誼と宋忠の二人に向かって、「司馬季主　腹を捧えて大笑して曰く、「大夫の類は道術有る者と観しに、今何ぞ言うことの陋なるや、何ぞ辞することの野なるや」と」とある。二句は、劉怜の大人先生と貴介公子・搢紳処士、および『史記』の司馬季主と賈誼・宋忠の関係を踏まえて、蘇軾と銭勰・蔣之奇の関係をあらわしている。7○明鏡一句　『六祖大師法宝壇経』行由品（『大正蔵』第四八巻）に「（神秀）自ら燈を執り、偈を南廊の壁間に書して、心に見る所を呈す。偈に曰く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡台の如し。時時払拭に勤め、塵埃を惹かしむること勿かれ」と。……慧能　偈して曰く、「菩提は本と樹無し、明鏡も亦た台非ず。本来　一物無し、何れの処にか塵埃を惹かん」と」とある。一句は、物に対する執着を戒めていう。8○浄瓶一句　浄瓶は、僧が手を浄めるための水を貯える器。『景徳伝燈録』巻九「潙山霊祐禅師」に、潙山霊祐が百丈の会下にあって典座をつとめていたときに、首座であった華林善覚とともに、百丈によって所見を試された公案が載っていて、「（百丈）即ち浄瓶を指して問いて云わく、「浄瓶と喚び作すを得ず、汝　什麼と喚び作すや」と。華林云わく、「木揆と喚び作す可からざるなり」と。百丈　肯ぜず、乃ち師に問う。師　浄瓶を蹋倒す。百丈　笑いて云わく、「第一坐　山子に輸却するなり」と」とある。一句は、画を焚くことも石を砕くことも無益であることをいう。9○盆山　一般に四方に連なって盆の状をなす山をいうが、ここでは上述の「僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり……」詩に「盛るに高麗の盆を以てし、藉くに文登の玉を以てす」とあるように、盆の中に置いた仇池石を山に見立てていうと解する。10○画馬　王晋卿が蔵する韓幹の画いた馬。12○棄溝瀆　『後漢書』孟嘗伝に「而るに草莽に沈淪し、好爵は及ぶこと莫し、廊廟の宝　溝渠に棄てらる」とある。15○公子　王詵のこと。上述の「僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり……」詩でも、王詵を指して「風流の貴公子」

と詠じている。16○耆年　老人。王融「三月三日曲水の詩の序」（『文選』巻四六）に「耆年は市井の游びを闕き、稚歯は車馬の好みを豊かにす」とある。17○転物　『楞厳経』巻二（『大正蔵』第一九巻）に「一切の衆生は……本心を失って物の転ずる所と為れり。故に是の中に於て大なるを観、小なるを観る。若し能く物を転ぜば、即ち如来に同じ」とある。一韓智翊の聞書は、「外物ヲ転ジテ我ガ物トスルヲ物ヲ転ズト云フゾ。サテコソ若能転物即同如来ト云フゾ」と記す（『四河入海』巻八の三）。18○求馬　『荘子』田子方篇に「汝は殆ど吾が著らかなる所以を著らかにするなり。彼已に尽きたり。而るに汝は之を求めて以て有りと為す。是れ馬を唐肆に求むるなり」とある。19 20○維摩・天女二句　『維摩経』菩薩品（『大正蔵』第一四巻）に、魔王波旬が、いったんは維摩詰居士に与えた一万二千人の天女を魔宮に連れ帰ろうとして、「居士　此の女を捨つ可し。一切の所有を彼に施す者、是れを菩薩と為す」というと、維摩は、「我れ既に捨てたり。汝　便ち将いて去れ。一切の衆生をして法願の具足を得しめん」と応じた。天女らは去ろうとせずに魔宮に戻らねばならぬ理由を維摩に尋ねたと記す。21○無尽燈　一燈をもって衆燈を燃すように、一人が法をもって多くの人を教化すること。『維摩経』菩薩品（『大正蔵』第一四巻）に、維摩が天女らに対して、「諸姉　法門有り、無尽燈と名づく。汝等は当に学ぶべし。無尽燈なる者は、譬えば一燈の百千燈を燃すが如し。冥きは皆な明るく、明は終に尽きず。是の如く、諸姉　夫れ一菩薩は百千の衆生を開導して、阿耨多羅三藐三菩提に心を発こさしむ。其の道意に於て亦た滅尽せず」と説いたと記す。22○久幽　幽は、くらいこと、また、かくれること。『漢書』王貢両龔鮑伝の冒頭にみえる厳君平についての揚雄の論に「蜀の厳は湛冥にして、苟見を作さず、苟得を治めず、久しく幽れてその操を改めず」とある。この句では長い間くらいままであることをいう。23○定心　心を一つの対象にとどめて散乱させないこと。散心に対していう。『無量寿経』巻下（『大正蔵』第一二巻）に「諸衆生に於て……等心・勝心、深心・定心、法を愛し法を楽しみ法を喜ぶの心、諸煩悩を滅し悪趣を離るる心を得たり」と記す。○無一物　第7句の注を参照。24○法楽一句　『維摩経』菩薩品（『大正蔵』第一四巻）に「（維摩）復た言う、「汝等　已に道意を発こせり。法楽有りて以て自ら娯しむ可し。応に復た五欲の楽しみを楽しむべからざるなり」と。天女　即ち問う、「何をか法楽と謂う」と。答えて言う、「常に仏を信ずるを楽しみ、法を聴かんと欲するを楽しみ、衆を供養するを楽

しみ、五欲を離るるを楽しむ。……」と」と記す。五欲は、眼・耳・鼻・舌・身の五官の欲望をいう。25〇三峨　『呉船録』巻上に、淳熙四年（一一七七）六月十七日に嘉州（楽山）を訪ねて、凌雲山に刻まれた大仏の頭面から足に達する十三楼の仏閣の「正面は三峨、余の三面も皆な佳山なり」という。続いて同じく十九日に、嘉州を発って峨眉山に向かうときの記載に、「峨眉に三山有り。一列を為して大峨・中峨・小峨と曰う」とある。26〇万馬　杜甫「安西の兵の過ぎて関中に赴きて命を待つを観る　二首」その二（『杜詩詳注』巻六）に「奇兵　衆きに在らず、万馬　中原を救わんとす」とある。〇部曲　軍隊の編成単位。部隊。司馬相如「上林の賦」（『史記』司馬相如伝）に「部曲の進退を睨み、将率の変態を覧る」とある。27〇臥雲　仕官せずに隠居生活を送ること。白居易「元郎中が同じく朝散大夫を制加せられ、懐いを書して贈らるるに酬ゆ」詩（『白居易集箋校』巻一九）に「身を終うるまで臥雲の伴と作らんことを擬し、月を逐うて須く薬を焼く銭を収むべし」とある。〇帰休　職を辞して帰郷すること。陶淵明「斜川に遊ぶ　幷びに序」（『陶淵明集』巻二）に「開歳　倏ち五日、吾が生　行ゆく帰休せんとす」とある。28〇神速　杜甫「故の武衛将軍の挽歌　三首」その二（『杜詩詳注』巻二）に「砂漠の外を横行し、神速　今に至るも称せらる」とある。〇〔＊＊〕将種は将軍の血筋。王詵が、宋初に詔勅を受けて四川に攻め込み、後蜀国を降伏させた王全斌の後裔であることをいう。

春になると氷には本来の堅さがなくなり、霜がおりるたびに葉はもとの緑を失ってゆきます。わずか数仞の高さを飛ぶ斥鷃は鵬が何のために万里を飛ぶのかと疑い、百本足の蚿は一本足の夔を嘲笑います。（穆父どの・穎叔どの）ご両所の威勢はよろしいけれど、先生だけはただ大笑いするばかりです。（物に対する執着を捨て去ってしまえば）明鏡にもともと台などはありませんし、浄瓶を蹴り倒す必要もありません。

盆の中にしつらえた山では身を隠すことはできませんし、画に描いた馬を飼育することもできません。ただただ庭や部屋に置こうと思っただけのこと、わざわざ溝に投げ捨ててしまう必要などありません。宝を焚き捨てようとするのは本当は宝を愛しているからですし、玉を砕こうとするのはまだ玉に執着しているからなのです。

一八

公子（晉卿）どのは賢明でいらっしゃって、口にされた言葉には年配者をしてもなるほどと思わせる力があることはかねてより存じています。（晉卿どのの）「物を転じる」無常の道理を拝見したいと思って、馬を無心してみたのです。

維摩は天女を捨て去りましたが、天女たちはなおも維摩にすがりました。維摩は無尽燈を授けて、暗闇の続く谷を照らせと説きました。「本来無一物」であることを悟れば、仏法の楽しみは五官の欲に勝るのです。

峨眉三山はわたしの郷里であり、万をもって数えるほどたくさんの馬は貴殿（晉卿どの）の配下です。（わたしは）いずれ山中に隠れて余生を送るつもりですが、（貴殿が騎馬隊を指揮して）ものすごい速さで敵を打ち破るのだけは見たいものです。

（担当　中　裕史）

一九三三（施三三―一七）

生日蒙劉景文以古畫松鶴爲壽且貺佳篇次韻爲謝

生日に劉景文が古画の松鶴を以て寿を為して且つ佳篇を貺うを蒙る。次韻して謝を為す

1　問予一室閒　　予に問う　一室の間
2　寧有千里廓　　寧ぞ千里の廓き有るか、と
3　塵心洗長松　　塵心　長松に洗われ
4　遠意發孤鶴　　遠意　孤鶴に発す
5　生朝得此壽　　生朝　此の寿を得て

6 死籍疑可落
7 微言在参同
8 妙契藏九籥
9 故人有奇趣
10 逸想寄幽壑
11 霜枝謝寒暑
12 雲翮無前却
13 何須構明堂
14 未羨巢阿閣
15 緬懷別時語
16 復作數日惡
17 詩腴固堪餐
18 字瘦還可愕
19 高標忽在眼
20 清夢了如昨
21 君今噲等伍
22 志與湛輩各
23 豈待相顧言
24 方爲不朽託

死籍　疑うらくは落とさる可し
微言　参同に在り
妙契　九籥に蔵む
故人　奇趣有り
逸想　幽壑に寄す
霜枝　寒暑を謝し
雲翮　前却無し
何ぞ須いん　明堂を構うるを
未だ羨まず　阿閣に巣くうを
緬かに別時の語を懐いて
復た数日の悪しきを作す
詩は腴えて固に餐らうに堪え
字は瘦せて還た愕く可し
高標　忽ち眼に在り
清夢　了らかに昨の如し
君は今　噲等の伍なるも
志は湛が輩と各おの
豈に相顧みて言うを待ちて
方めて不朽の託を為さんや

25　子雲老執戟　　子雲は執戟に老い
26　長孺終主爵　　長孺は主爵に終う
27　吾當追喬松　　吾れ当に喬・松を追うべし
28　子亦鄙衛霍　　子も亦た衛・霍を鄙しめ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○生日　蘇軾は景祐三年（一〇三六）十二月十九日に生まれている。ここにいう生日とは、元祐六年（一〇九一）の誕生日を指す。孔凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇一六頁には、本作品を元祐六年の十二月十九日の作とし、『蘇軾全集校注』巻三四でも、元祐六年末の作としている。○劉景文　劉季孫（字は景文）のこと。元祐六年の十一月に隰州（山西省）の知事として赴任することになった劉季孫は、その道中に蘇軾を訪ね十日ほど逗留した。これが二人が直接交遊した最後の機会となり、劉季孫は元祐七年五月に隰州で亡くなった。『蘇軾詩注解（十七）』に収める作品番号一八二五の詩の注を参照。○以古画松鶴為寿　蘇軾は劉季孫から、松と鶴が描かれた古画を誕生日の祝いに贈られた。蘇軾の詩には「楽全先生の生日に鉄の拄杖を以て寿と為す　二首」（『合注』巻二一）や「子由の生日に檀香観音像及び新合の印香、銀の篆盤を以て寿と為す　一首」（『合注』巻三七）のように、自分と深い関わりをもつ人物の誕生日に贈り物をすることを述べたものがある。○佳篇　劉季孫が蘇軾に贈った詩をいう。その詩は現存しない。

12○問予・寧有二句　予を子に作るテキストもあるが、ここでは宋本による。一室は、官僚として執務する部屋をいう。白居易「禁中」詩（『白居易集箋校』巻五）に「門厳しく九重静かにして、窓幽く一室閑かなり」とある。廓はひろびろとした開放的な空間をいう。『淮南子』精神訓に「大廓の宇に処り、無極の野に遊ぶ」とある。34○塵心・遠意二句　塵心は、日々の世俗のなかで穢れてしまった心をいう。白居易「南侍御が石を以て相贈り……」詩（『白居易集箋校』巻三六）に「泉石磷磷として声は琴に似たり、閑眠静聴して塵心を洗う」とある。遠意は、高遠な意境をいう。賈島「集文上人が遊方するを送る」詩（『全唐詩』巻五七一）に「芳草に分首せし時、遠意は青天の外」

とある。6○死籍　録鬼簿に記された死亡の年月日。『抱朴子』内篇巻二（金丹）に「之を服すること百日にして肌骨堅強、之を服すること千日にして、司命　死籍を削去す」とある。7○微言　奥深い味わいのある言葉。『漢書』藝文志に「昔　仲尼没して微言絶ゆ」とあり、その顔師古の注には「精微、要妙の言」とある。○参同　『周易参同契』のこと。後漢の魏伯陽による煉丹術の書。極めて難解な比喩と隠語が散りばめられ、具体的な煉丹の方法や技術過程は示されていないが、南朝梁の江淹や唐の白居易がこれに基づいて煉丹を行ったといわれる。白居易「微之の郭虚舟錬師に贈別するに同ず　五十韻」（『白居易集箋校』巻二一）に「嗟　我が天地の間、術有れども人の知る莫し、死籍を逃る可きを得、唯だ三尸を走らすのみならず、我に授かりし参同契、其の辞は妙にして且つ微なり」とある。8○妙契　霊妙な秘訣。司空図「詩品二十四則　形容」（『全唐詩』巻六三四）に「海の波瀾、山の嶙峋、倶に大道に似て、妙契は塵に同じ、形を離れて似るを得」とある。○九籥　道教の経典をいれる容器。鮑照「升天行」（『文選』巻二八）に「五図は金記を発き、九籥は丹経を隠す」とある。その李善注には「鄭玄の易緯注に曰く、「斉・魯の間、門戸及び器を蔵むる管を名づけて籥と曰う」と。以て経を蔵む。而して丹に九転有り、故に九籥と曰うなり」とある。9○奇趣　すばらしい情趣。謝朓「敬亭山の詩」（『文選』巻二七）に、「要ず奇趣を追い、此に即きて丹梯に陵らんと欲す」とある。10○逸想　俗世を超越した思い。陶淵明「胡西曹に和し、顧賊曹に示す」詩（『陶淵明集』巻二）に「逸想　淹む可からず、猖狂　独り長く悲しむ」とある。○幽壑　奥深い渓谷をいう。駱賓王「春の晩れに李長史に従って開道林の故山に遊ぶ」詩（『全唐詩』巻七九）に「幽尋　幽壑を極め、春望　春台に陟る」とある。ここでは、劉季孫から贈られた古画に描かれた景色をいう。11○霜枝　霜をしのぐことのできる強靭な枝をいう。ここでは古画にみえる松の枝をいう。『論語』子罕篇に「子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るることを知るなり」とある。蘇軾「劉景文に贈る」詩（『蘇東坡詩選』二五八頁）に「荷は尽きて　已に雨に擎ぐるの蓋無く、菊は残えて猶お霜に傲るの枝有り」とあり、劉季孫への詩に霜枝の語を使っている。12○雲翮　雲の高みにまで飛翔する鳥をいう。陶淵明「乙巳の歳三月、建威参軍と為りて、都に使して銭渓を経」詩（『陶淵明集』巻三）に「微雨は高林を洗い、清飈は雲翮を矯がらしむ」とある。○前却　進む退くなどの動作。『呉子』治兵篇に「進んでは当たる可からず、退

いては追う可からず、前却するに節有り、左右麾に応ず」とある。ここでは、一韓智翊の聞書に「サテ鶴ト云（フ）者ハ飛騰自在ナルモノナル程ニ、前ミ却クニモ労スル事ナキゾト云（フ）ゾ」（『四河入海』巻二〇の二）というように、鶴が進むにも却くにも労することなく自由自在なるをいう。13○構明堂　構は合注は搆につくるが、宋本に拠る。明堂は、古代中国において天子が政教を明らかにした建物。白居易「松樹に和す」詩（『白居易集箋校』巻二）に「尚わくは斧斤以て、之を伐って棟梁と為す可し、身を殺して其の所を獲、君が為に明堂を構えん」とある。14○巣阿閣　黄帝のときに鳳凰が楼閣に巣をつくった故事をさす。「古詩十九首」その五（『文選』巻二九）に「交疏　結綺の窓、阿閣　三重の階」の李善注に『尚書中候』に曰く、昔　黄帝軒轅のおり、鳳皇　阿閣に巣くう。周書に曰く、明堂は咸な四阿有り、然らば則ち閣に四阿有り、之を阿閣と謂う」とある。16○数日悪　劉季孫との別れを思い出すと数日気分がすぐれないことをいう。蘇軾「文与可が出でて陵州に守たるを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五八頁）を参照。17○詩腴　詩が豊かな味わいを秘めていることをいう。『南斉書』謝瀹伝に「世祖嘗て王儉に問う、「当今誰か能く五言詩を為すや」と。儉対えて曰く、「謝朏　父の膏腴を得」と」（世祖は、武帝（四八二～四九三年在位）、謝朏は、謝瀹の兄、謝莊の子）とある。○堪餐　欣賞に十分堪えうる優れたものをいう。陸機「楽府十七首日出東南隅行」（『文選』巻二八）に「鮮膚　一に何ぞ潤う、秀色　餐らう可きが若し」とある。18○字瘦　書の文字が細く鋭いさまをいう。杜甫「李潮が八分小篆の歌」（『杜詩詳注』巻一八）に「苦県の光和は尚お骨立す、書は瘦硬なるを貴び方に神に通ず」とある。蘇軾「劉景文が寄せらるるに次韻す」詩（『蘇軾詩注解（十三）』）にも「細かに落墨を看れば　皆な松のごとくに瘦せたり、想い見る　髯を掀げて正に鶴の孤なるごとくならんことを」と、劉季孫の書を評している。○可愕　書が感情に訴えかけることをいう。韓愈「高閑上人を送る序」（『韓昌黎集』巻二一）に「往時　張旭　草書を善くす、他の技を治めず……天地事物の変、喜ぶ可く愕く可く、一に書に寓す」とある。19○高標　秀でた人物をいう。盧照隣「京に還りて贈別す」詩（『全唐詩』巻四二）に「戯鳧　断岸に分かれ、帰騎　高標に別る」とある。20○清夢　俗塵に汚されない清らかな心でみる夢。蘇軾「章七が出でて湖州に守たるに和す　二首」その一の注（『蘇東坡詩集』第三冊五九二頁）を参照。○了　はっきりとして明晰なさま。李白「溧陽の北湖亭

に遊び……」詩（『李太白全集』巻一〇）に「清光は了らかに眼に在り、白日は顔を披くが如し」とある。21〇噲等伍　隰州（山西省）の知事として赴任する劉季孫の思わしくない境遇を、『史記』淮陰侯列伝にみえる、韓信が漢王劉邦に黜けられて、樊噲と同列の身分にまで落とされたと嘆いた故事を用いている。蘇軾「劉景文が贈らるるに和す」詩（『蘇軾詩注解（十七）』）の注を参照。22〇湛輩　『晉書』羊祜伝にみえる、千載に名を残すことなく、時の推移とともに湮滅してしまう鄒湛の存在。蘇軾「峴山」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊二〇三頁）を参照。23〇豈待一句　顧は願に作るテキストもあるが、宋本が顧に作るのに従う。一韓智翃の聞書に「此（ノ）句ハ志与ノ句ニ承（ケ）テ云（フ）ゾ。昔　羊祜ガ鄒湛ヲ相顧（ミ）テ、宇宙有（リテ）自（リ）便（チ）此（ノ）山有（リ）ト云（フ）テ下ヘムケテ、古ノ人ノ名ノ湮没シテ称セラレザルヲ歎ズルガ如クナルマデモナク、此（ノ）人ノ声名ハ千歳不朽ニシテ、伝ヘ称セラルベキゾ」とあるように、先に引いた『晉書』羊祜伝の故事を意識している。24〇不朽託　朽ちることなく千載に遺る存在。欧陽修「蔡君謨に与えて「集古録の序」を書するを求むる書」（『欧陽文忠公文集』巻六九）に「是に由りて之を言わば、僕が不朽の託を為す者は、君謨が一揮毫の頃に在る爾」とある。25〇子雲一句　子雲は、漢の揚雄（揚雄とも書く）の字。執戟は、宮廷の侍衛官。曹植「楊徳祖に与うる書」（『文選』巻四二）に「昔　楊子雲は、先朝の執戟の臣なるのみ」とあり、その李善の注に「「漢書」に曰く、楊雄が「羽猟の賦」を奏して郎と為る。然れども郎は皆な戟を執りて持するなり。東方朔が「客の難ずるに答う」に曰く「官は侍郎に過ぎず、位は執戟に過ぎず」と」とある。優れた文才をもつ揚雄も執戟のような地位に終わったのであり、蘇軾は蜀出身の揚雄を自らになぞらえている。蘇軾「再び徳麟が「新たに西湖を開く」に次韻す」詩（『蘇軾詩注解（二十一）』）を参照。26〇長孺一句　長孺は、漢武帝の臣下であった汲黯の字。地方の太守となり功績をおさめて主爵都尉（封爵を掌る官）になった。『史記』汲黯伝に「汲黯、字は長孺、濮陽の人なり。……遷りて東海の太守と為る。……歳余東海大いに治まりて之を称す。上聞きて召し、以て主爵都尉と為して九卿に列す」とある。ここでは汲黯を劉季孫になぞらえ、地方の太守の任を終えて朝廷に戻るであろうと詠じている。27〇吾当一句　喬は王子喬、松は赤松子、ともに仙人とされる。蘇軾が彼らに従って仙界へ赴くことをいう（『蘇軾詩注解（十五）』に収める作品番号一八〇八の詩の注を参照）。28〇衛霍

二四

衛は衛青、霍は霍去病、ともに漢王朝の名将とされる。曹植「呉季重に与うる書」（『文選』巻四二）に「蕭・曹も儔とするに足らず、衛・霍も侔しくするに足らざるなりと謂う」（蕭は蕭何、曹は曹参）とある。

役人暮らしの窮屈な一室にいながら、どうして千里の広がりの中にお在りなのかと私に尋ねられました。俗塵にまみれた心が千尺の松の樹で清められ、高遠な志が万里を飛翔する孤高の鶴によって啓かれるのです。誕生日の祝いにこの古画をもらい、その上、祝いのすばらしい詩をいただいたのですから、寿命もきっとのびることでしょう。あなたからいただいた奥妙なる言辞は『周易参同契』に通っており、その霊妙なる秘訣は九籥の箱に収められた書物につながります。

親しい劉景文どののことばには人並みはずれた趣があり、その超俗の心ばえをこの深山幽谷に託されました。霜に挫けぬ堅牢な松の枝は変節をきびしく拒み、雲間に飛ぶ鶴はその動きに囚われることはありません。この松は天子の明堂にかざられることなく、この鶴は凛として、宮殿に巣くう鳳凰を羨むようすもありません。

あなたとお別れした時の語らいを遠く思い起こして、またも数日間にわたる愁いにとりつかれております。いただいた詩は脂がのってもとより美味で、細く勁い筆跡からもおこころがそのまま伝わってきます。あなたの高逸なるお姿がたちまち眼前に現れて、それは清らかな夢がまるで覚めたばかりのようにはっきりしています。

あなたはいま不遇な境にある樊噲のようですが、その志は鄒湛の輩とは違います。言うまでもなく、もともと千載に不朽の名を遺す人物なのです。揚雄（のごとき私）は、戟を手に執って諸門を警護する地位で老いさらばえてしまい、他方、汲黯（のごときあなた）は、朝廷で栄達して最後を飾ることでしょう。わたしはきっと仙人の王子喬や赤松子のあとにつづきましょう、あなたも武功をたてた衛青や霍去病なぞは見下してしまいなさい。

一九三四（施三三―一八）

程徳孺惠海中柏石兼辱佳篇輒復和謝

程徳孺　海中の柏石を恵み、兼ねて佳篇を辱くす。輒ち復た和して謝す

1　嵐薫瘴染却敷腴　　嵐薫し瘴染みて敷腴を却くも
2　笑飲貪泉獨繼吳　　笑って貪泉を飲んで、独り呉を継ぐ
3　未欲連車收薏苡　　未だ車を連ねて薏苡を収めんことを欲せず
4　肯教沉網取珊瑚　　肯て網を沈めて珊瑚を取らしめんや
5　不知庚嶺三年別　　知らず　庚嶺　三年の別れ
6　收得曹溪一滴無　　曹溪の一滴を収め得たるや無や
7　但指庭前雙柏石　　但だ庭前の双柏石を指して
8　要予臨老識方壺　　予が老いに臨んで方壺を識らんことを要む

○元祐七年（一〇九二）、五十八歳の作。時に都の開封（河南省）に在った。

○程徳孺　程之元のこと。徳孺はその字。排行により程六とも呼ばれる。眉山（四川省）の人。蘇軾の母程氏はこの家の出で、蘇軾の姉は徳孺の兄之才（字は正輔）に嫁いでいる。蘇・程両家の関係については、蘇軾「表弟程六の楚州に知たるを送る」詩（『合注』巻二七）の詩題の施注に詳しく見える。蘇軾には、之才・之元・之邵の三兄弟との交流に因んだ詩が多数あり、本詩もその一つである。この年、程徳孺は主客郎中として開封に在った。『続資治通鑑

（担当　中　純子）

長編』巻四七四に「（元祐七年六月庚午）右の朝奉郎程之元　主客郎中と為る」とある。これより前、元祐五年には、広南東路刑獄（『続資治通鑑長編』巻四四六「元祐五年八月乙未」）として嶺南に在った。

○海中柏石　珊瑚のように海中に生じる、柏（コノテガシワ）の形状の石か。范成大『桂海虞衡志』の「志金石」に、「石柏は、海中に生ず。一幹極めて細く、上に一葉有り、宛も是れ側柏の扶疏たると、小かも異なる無し。……然るに皆な奇物なり」。程徳孺が嶺南で入手し、蘇軾に贈ったと考えられる。或いは、盆石の一種か。韓愈「楊之罘を招く」詩（『韓昌黎集』巻五）に「柏　両石の間に生じ、万歳　終に大ならず」とあり、これを踏まえて、蘇軾「柏石図」詩（『合注』巻二二）に「柏　両石の間に生ず、天命本より此くの如し」と詠じる。『四河入海』巻二〇の二に引く万里集九の説に「石上ニ柏樹ヲ栽エル也」とある。

1○嵐薫瘴染　この四字は互文になっている。嵐・瘴は、南方の地特有の瘴気。薫・染は、染み込むこと。○敷腴　肥えてゆたかなさま。鮑照「行路難に擬す　十八首」その五（『鮑氏集』巻八）に「人生　苦しみ多く歓楽少なし、意気の敷腴たるは盛年に在り」とある。1句は、程徳孺が、嶺南に在任三年の間に、特有の気候のためにやつれたさまを述べている。2○笑飲一句　貪泉は、広州（広東省）にあった泉。呉は、晉の呉隠之のこと。呉隠之は、飲めば貪欲になると言われるその泉の水を飲んだが、ますます清廉であったという。蘇軾「荊門の張都官維の恵泉の詩に和せらるるに答うるに次韻す」詩（『蘇東坡詩集』第一冊一八六頁）の注を参照。一句は、1句で程徳孺のやつれた姿を述べたのに対して、徳孺が、身をやつれさせながらも、その勤めぶりが清廉であったことを、呉隠之の故事に擬えている。3 4○未欲・肯教二句　薏苡は、はと麦。後漢の馬援が交趾（ベトナム）で日頃から薏苡の実を食して、心身軽快で過ごせたことから、洛陽で栽培するという触れ込みで薏苡の実を車一杯に積んで持ち帰ったが、実は、車載の中身は薏苡ではなく、南海の珠玉であった（『後漢書』馬援伝）。蘇軾「次韻して王鞏に和す　六首」その五（『合注』巻二一）に「馬援　初めて交趾に在り、嘗みに薏苡の実を餌す」とある。○沈網取珊瑚　船から網を下ろして、珊瑚を根こそぎ獲ること。『新唐書』西域伝下に、拂菻（古の大秦）の記事として「海中に珊瑚の洲有り、海人　大舶に乗りて、鉄網を水底に堕とす」とある。3 4二句は、程徳孺の嶺南での清廉な勤めぶりを詠じた2句に続けて、徳孺

が、都に帰還するに当たって高価な珍品を持ち帰ったりせず、また、任地で強欲な行ないもしなかったと称している。程徳孺から贈られた海中柏石に因んで、程徳孺の人柄と通じるものとして、故事と対比している。5 6〇不知・収得二句　庾嶺は、五嶺の一つ。『元和郡県図志』巻三四の嶺南道韶州曲江県の項に「大庾嶺、……県の東北一百七十二里に在り」とある。唐・鄭谷「咸通十四年の府試　木向栄」詩（『鄭谷詩集箋注』巻二）に「庾嶺　梅先ず覚め、隋堤　柳暗くして驚く」とあり、蘇軾「張庖民が挽詞」（『合注』巻二四）に「庾嶺　銘旌暗く、秦淮　旧宅荒る」とある。〇曹溪一滴無　曹溪は、韶州（広東省）にある。禅の六祖慧能が、曹溪宝林寺を中心に活動したことから、慧能を示す。曹溪一滴水は、慧能より流れ出た正法のこと。禅の源が、すべて慧能に始まることから、禅の根本を曹溪一滴水という。『碧巌録』巻一に、或る僧の「如何なるか是れ曹溪の一滴水」との問いに、法眼文益が「是れ曹溪の一滴水」と答えた。これを聞き、天台徳韶が忽然と大悟した、という話が見える。二句は、程徳孺が三年間嶺南に在ったことに寄せて、かの地に所縁の曹溪慧能の禅の教えを修め得たのでしょうか、と問いかけている。7〇但指一句　柏石は、詩題の注を参照。庭前双柏石は、庭さきの二つの柏石。禅の公案に、仏法の真理を問われて、ただ「庭前の柏樹子」と答えた趙州従諗禅師の話がある（『趙州録』巻上）。一句は、程徳孺から贈られた柏石を、公案の柏樹に擬して、柏樹によって禅の真理を示した禅師のように、徳孺が蘇軾に対して或る真理を指し示してくれている、と述べるが、続く8句では、仙山である方壺を話題にして、禅の世界から仙の世界に転じている。蘇軾は、両者をとても近いものと考えていたのか。一韓智翊の聞書に「程徳孺、此ノ柏石ヲ指（シ）テ我ニクルルワ（ハ）、我ヲシテ此（ノ）柏石ヲ見セテ方壺ノ仙山ノ佳趣ヲ識ラシメン為デアリゲナゾト云（フ）心ゾ」。8〇臨老　老いを迎える。蘇軾「朱寿昌郎中、少くして母の在る所を知らず、……詩」（『蘇東坡詩集』第二冊三七九頁）に「羨む　君が老いに臨んで相逢うを得たるを、喜び極まって言無く　涙　雨の如し」とある。〇方壺　中国東海上にあるとされた仙山（島）の一つ。『列子』湯問篇に「渤海の東、幾億万里なるを知らず。……。其の中に五山有り。一を岱輿と曰い、二を員嶠と曰い、三を方壺と曰い、四を瀛洲と曰い、五を蓬莱と曰う」とある。

嶺南の瘴気にひどく浸されて生きるよろこびを失いながらも、あなたはひとり彼の呉隠之の後を受け継いで、

笑って貪泉の水を飲んでも清廉さは揺るがない。薏苡と見せかけて珠玉を積み込んだ車を連ねて帰京しようとはしなかったし、鉄の網を海中に沈めて珊瑚を獲らせようとなさったろうか。

大庾嶺の地で別れてこのかた三年の間に、曹渓の一滴の水（慧能の禅そのもの）を身につけられたかどうか。あなたは禅僧のように黙って庭先の二つの柏石を指さすばかりで、老境に入った私に仙界への道をわからせようとなさるのみ。

二八

一九三五（施三三―一九）

次秦少游韻贈姚安世

秦少游が韻に次ぎて、姚安世に贈る

1 帝城如海欲尋難　帝城　海の如く　尋ねんと欲するに難し
2 肯捨漁舟到杏壇　肯て漁舟を捨てて杏壇に到る
3 剝啄扣君容膝戶　剝啄　君が容膝の戸を扣かば
4 巍峨笑我切雲冠　巍峨　我が切雲の冠を笑わん
5 問羊獨怪初平在　羊を問うて独り怪しむ　初平が在ることを
6 牧豕應同德曜看　豕を牧って応に徳曜と同じく看るべし
7 肯把參同較同異　肯て参同を把って同異を較べんや
8 小窗相對爲研丹　小窓に相対して為に丹を研らん

○秦少游　秦少游は、秦観（一〇四九―一一〇〇）。少游はその字。蘇軾「秦観秀才が贈らるるに次韻す。秦は孫莘老・

李公択と甚だ熟す、将に京に入って挙に応ぜんとす」詩（『蘇東坡詩集』第四冊五九二頁）の詩題の注を参照。○姚安世　姚安世は、本注解に収める次の詩（作品番号一九三六）の詩題に見える姚丹元のことを指すか。葉夢得『避暑録話』巻上に記事があり、それによると、姚丹元は、京師の富人王氏の生まれだが、不肖で家を追われ、建隆観の道士に師事して道術を学んだ。大言を好み、詩には奇誕の語が見られたという。

2○肯捨一句　杏壇は、杏の木の生えた小高い場所。『荘子』漁父篇に、「孔子　緇帷の林に遊び、杏壇の上に休坐す。弟子　書を読み、弦歌して琴を鼓す。曲を奏すること未だ半ばならざるに、漁父なる者有り、船を下りて来たる」とある。一句は、前の1句で、広大な京師で人の家を探し当てるのは難しいと詠じたのをうけ、そのような中、わざわざ蘇軾を訪ねて来てくれた姚安世を、杏壇の孔子を訪ねて舟を下りた漁夫に喩えている。3○剥啄　門を叩く音の形容。蘇軾「再び径山に遊ぶ」詩（『蘇東坡詩集』第三冊一〇六頁）の注を参照。○容膝戸　こじんまりとした家。容膝は、やっと膝が入るだけの狭い空間。作品番号一八一四の詩（『蘇軾詩注解（十五）』）の注を参照。姚安世の家のさまを想像して述べている。1 2句と3句との関係を、姚安世が蘇軾の家を訪ね当ててくれたことへのお返しとして、今度は蘇軾が姚安世の家を訪ねようとするという意と解する。別に、姚安世は蘇軾の家を訪ねあてることはできないだろうからと、蘇軾のほうから姚安世を訪ねて行く意との解もある。『四河入海』巻一九の三に引く瑞渓周鳳の説に「此ノ以下ノ二句ハ、当ニ上ノ句ヲ以テ二義之ヲ見ルベシ。第一ノ解ノ如キハ則チ姚安世来訪ス、故ニ東坡モ亦其ノ居ニ過ル也。第二ノ解ノ如キハ則チ言フココロハ姚安世ハ我ガ居ヲ尋ヌベカラズ、故ニ我行キテ之ヲ訪ネル也」とある。4○巍峨　高いさま。○切雲冠　冠の名。作品番号一六八九の詩（『蘇軾詩注解（八）』）の注を参照。一韓智翊の聞書には「切雲冠ノタカキ冠ヲキテ、セバキ処ヘマイッタラバ、サテモ東坡ドノハ此ノセバキ処ヘサテモヨク御入リアッタヨト云（ツ）テ、定（メテ）御笑（ヒ）ゾアランスラウト、預先ヅ思（フ）ゾ」とある。5○問羊一句　初平は、黄初平。仙道を学び、仙人になったという話が『神仙伝』巻二に見える。蘇軾「子由が将官梁左蔵仲通を送るに和す」詩（『蘇東坡詩集』第四冊五八九頁）の注を参照。一句は、道士のもとで修養を積んだ姚安世について、黄初平の故事に擬えている。6○牧豕一句　豕は、豚。後漢の時、上林苑で豚飼いをしていた梁鴻は、実直精励なことで名

を知られた。時に、梁鴻に嫁ぐことを希望した孟氏の娘と結婚した梁鴻は、妻に徳があることに因んで、妻の名を孟光、字を徳曜としたという故事が『後漢書』梁鴻伝に見える。一句は、姚安世に向かって、実直に仕事に励むあなたには、それを見守って世話をやいてくれる夫人がいますね、と梁鴻の故事に擬えている。なお、姚安世の妻についてはよく分からない。78〇肯把・小窓二句　参同は、『周易参同契』。本注解に収める作品番号一九三三の詩の注を参照。研丹は、校訂に用いる朱墨を磨ること。7句で述べた『参同契』の校訂に用いると考えられる。二句は、蘇軾が姚安世の家を訪ねたなら、『参同契』についてあれこれ校訂をしましょう、と呼びかけている。瑞渓周鳳の説に「此（レ）以下ノ二句、言（フココロハ）姚安世若（シ）我ヲ容（レバ）、相共ニ神仙ノ秘訣ヲ商確シテ、当ニ奉侍シテ渠ガ為ニ朱ヲ研スル也」とある。

天子のおひざ元の京都は海のように広大で、人を訪ねあてるのは難しいというのに、船を下りて杏樹の丘に現れた老漁夫さながらに、あなたはわざわざ私を訪ねてくださいました。（今度は）私があなたのこじんまりとしたお家の戸をこつこつと叩きましょう。するとあなたは私の切雲冠を見て大笑いすることでしょう。

（あなたに）羊はどこかと尋ねると、仙人黄初平がここにいるかのよう、（あなたが）かの梁鴻のように豚を飼えば、徳曜のごとき奥様がいて世話をなさるに相違ない。『参同契』を手に校訂をしようではありませんか、あなたのお家の小さな明かり窓のもとで一緒に朱墨を磨りましょう。

（担当　原田直枝）

一九三六・一九三七（施三三―二〇・二一）

次丹元姚先生韻二首

丹元姚先生が韻に次ぐ　二首

一九三六（施三三―二〇）

その一

1 浮生知幾何　浮生　知んぬ　幾何ぞ
2 僅熟一釜羹　僅かに一釜の羹を熟せしむ
3 那於俯仰間　那ぞ俯仰の間に於て
4 用此委曲情　此の委曲の情を用いん
5 自憐無他腸　自ら憐れむ　他腸無くして
6 偶亦得此生　偶たま亦た此の生を得たるを
7 懸知當去客　懸かに知る　当に去るべき客
8 中有不亡存　中に亡びずして存する有り
9 但恐宿緣重　但だ恐る　宿縁重く
10 毎爲習氣昏　毎に習気の昏ますところと為るを
11 似聞梅子眞　似かに聞く　梅子真
12 近在吳市門　近ごろ呉の市門に在り、と
13 未能肩拍洪　未だ　肩　洪を拍つ能わず
14 但欲目擊溫　但だ温に目撃せんと欲す
15 不敢叩門呼　敢えて門を叩いて呼ばず
16 恐作踰垣奔　恐らくは垣を踰えて奔るを作さん

17　且令紹介先　　且く紹介をば先んぜしめて
18　徐以方便論　　徐ろに方便を以て論ぜん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○丹元姚先生　前の詩（作品番号一九三五）にみえる姚安世のことと思われる。その詩題の注を参照。丹元子はその号で、蘇軾とは王鞏（定国）を通じて知り合ったという（葉夢得『避暑録話』巻上）。姚氏の元の詩は伝わらないが、蘇轍が同じ詩に唱和したとみられる「姚道人に次韻す　二首」（『欒城後集』巻一）が遺る。

1○浮生一句　浮生は、はかない人生。『荘子』刻意篇に、「其の生くるや浮かべるが若く、其の死するや休うが若し」とある。また、李白「春夜、従弟と桃花の園に宴するの序」（『李太白全集』巻二七）に、「而して浮生は夢の若し、歓びを為すこと幾何ぞ」とある。2○僅熟一句　羹は、スープ。一句はいわゆる「黄粱一炊の夢」の故事（沈既済『枕中記』）に、「主人　黄粱を蒸して尚お未だ熟せず」とあるをふまえる。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八〇の詩の注を参照。また、『新唐書』回鶻伝下に、「骨利幹は瀚海の北に処り……又た北のかた海を度れば、則ち昼長く夜短し。日入りて羊胛（羊の肩の肉）を亨、熟すれば、東方已に明らかなり。蓋し日出づる処に近し」とあり、欧陽修「観文（殿）の王尚書が西京の牡丹を恵まるるに謝す」詩（『居士集』巻七）に、「爾来　覚えず　三十年、歳月　纔かに羊胛を熟するが如し」とある。3○俯仰　あおぎ、うつむく。ごくわずかな動作。延いて、短い時間をいう。「鴉種麦行」の注（『蘇東坡詩集』第二冊四〇九頁）を参照。4○委曲　細かくて込み入っていること。『史記』天官書に、「委曲小変に至るが若きは、勝げて道う可からず」とある。以上の二句について一韓智翊は、「只（ダ）何事モ俯仰ノ間ニ過（ギ）テ陳跡ト作（ル）ゾ。其ノ間ニヲイテ、何ゾ是非得失ヲ論ジテ、無窮ノ事ヲ胸中ニ置（イ）テ用フゾ。委曲（ノ）情ハ、妄念妄想ヲ云（フ）ゾ」（『四河入海』巻一九の三）と記す。5○無他腸　心に悪意がないこと。『史記』衛綰伝に、「上以為えらく、廉にして忠実、他腸無し、と」とあり、索隠は小顔を引いて「心腸の内に他悪無きなり」という。6○得此生　陶淵明「飲酒　二十首」その七（『陶淵明集』巻三）に、「嘯傲す　東軒の

下、聊か復た此の生を得たり」とある。7○当去客　陶淵明「雑詩　十二首」その七（『陶淵明集』巻四）に、「家は逆旅の舎たり、我は当に去るべき客の如し」とある。8○中有一句　『荘子』田子方篇に、「故き吾れを忘ると雖も、吾れ忘れざる者の存する有り」とある。9○宿縁　前生からの因縁。『蘇軾詩注解（二十二）』に収める作品番号一八八三の詩の注を参照。10○習気　仏教で、消えずに残る煩悩のこと。『蘇軾詩注解（三）』に収める作品番号一六一六の詩の注を参照。11 12○似聞・近在二句　梅子真は、漢の梅福のこと。子真はその字。長安に学んで仕官したが、王莽が専権するや妻子を棄てて故郷の九江に去って仙となった。その後、梅福を会稽で見た者があり、姓名を変じて「呉の市門の卒」となっていたという（『漢書』梅福伝）。「陳海州が「懐いを書す」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四〇五頁）を参照。13○未能一句　洪は神仙の名で、洪崖先生のこと。堯の時にすでに三千歳であったという（『太平広記』巻六に引く『洞冥記』及び『東方朔別伝』「東方朔」）。郭璞「遊仙詩　十九首」その三（『文選』巻二一では、七首その三）に、「左には浮丘の袖を挹り、右には洪崖の肩を拍つ」とある。14○但欲一句　温は、『荘子』田子方篇にみえる、道の体得者である温伯雪子のこと。孔子に熱心に面会を求められた温伯雪子は、面会後に嘆息して孔子のことを「礼には詳しいが、人心の機微を知るに疎い」と評したのに対し、沈黙したままの孔子に弟子の子路がわけを尋ねると、孔子は「夫の人の若き者は目撃して道存す。亦た以て声を容る可からず」と答えた故事。16○踰垣　『孟子』滕文公下篇に、「古者は臣為らざれば見えず。段干木は垣を踰えて之を辟け、泄柳は門を閉ざして内れず」とある。17○紹介　なかだちをする。また、引き合わせる。『史記』魯仲連伝に、「平原君　遂に新垣衍を見て曰く、「東国に魯仲連先生なる者有り。今、其の人此に在り。勝請う、紹介を為して、之を将軍に交わらしめん」と」（勝は平原君の名）とある。18○方便　仏教で、仏が衆生を真の教えに導くため、仮に設けた手段や説き方のこと。『維摩経』方便品（『大正蔵』第一四巻）に、「其れ方便を以て、身に疾有るを現ず」とある。「諸もろの仏舎に遊んで、一日に釅茶七盞を飲み……」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊一二七頁）を参照。

はかない人生がどれほどの長さなのかといえば、それは釜のスープができあがるほどの僅かな時間のこと。

三三

どうしてそんなに短い時間のなかで、こんなくだくだしいことを思い煩っていてよかろうか。他意もなく、たまたまこの生を得たことを、われながらいとおしく思うのだ。

人はいつかはこの世を去る旅人だとはいうが、その人の内にも滅びることなく続くものがあるという。だがそれも前世からの重い因縁から、往々にして煩悩の名残に妨げられて（続かなくなって）しまうのだ。

聞けば近ごろ梅子真どのが、呉県の市門にやってこられたとか。肩をたたいて親しく交わって登仙することはかなうまいが、そのお姿をひとめ拝ませていただきたいものだ。でも門をたたいて呼ばわるなどはもってのほか、それでは垣根を跳びこえて逃げてしまわれるだろう。まずは誰かに仲を取りもっていただいて、悟りに導くための方便をじっくりと話し合っていただきましょう。

一九三七（施三三―二一）

その二

1 不學劉更生　学ばず　劉更生の
2 黄金鑄上方　黄金　上方に鋳せしむるを
3 不學房次律　学ばず　房次律の
4 身事問潁陽　身事　潁陽に問うを
5 王烈亦何人　王烈　亦た何人ぞ
6 叔夜未可量　叔夜も未だ量る可からず
7 獨見神山開　独り神山の開くるを見て

8　遽餐石髓香　　遽かに石髓の香しきを餐す
9　至道尚聽瑩　　至道　尚お聽瑩
10　麤才終蹶張　　麤才　終に蹶張
11　先生喜而笑　　先生　喜びて笑い
12　幅巾登我堂　　幅巾にして我が堂に登る
13　苦誓指黄壤　　苦ろに誓いて黄壤を指す
14　要言刻青琅　　要言　青琅に刻まん
15　蓬萊在何許　　蓬萊　何れの許にか在る
16　弱水空相望　　弱水　空しく相望む
17　且當從嵇阮　　且く当に嵇・阮に従うべし
18　聊復數山王　　聊か復た山・王を数えん
19　達人友四海　　達人は四海を友とし
20　曲士守一疆　　曲士は一疆を守る
21　愼勿使形諜　　愼んで形をして諜かならしむる勿かれ
22　兒童驚夜光　　児童　夜光に驚かん

12〇不学・黄金二句　更生は、漢・劉向の本名（字は子政）。武帝の時、劉向の父の劉徳は、神仙が物の怪を使って金を作ることなどを述べた書『枕中鴻宝苑秘書』を入手した。これを読んだ劉向は奇書として献上し、かつ黄金が作れることを言った。天子は劉向に尚方（御物の製造所。上方とも表記する）を司らせて黄金を鋳造させたが、莫大

な費用をかけても成功せず、劉向は弾劾を受けた（『漢書』劉向伝）。３４〇不学・身事二句　房次律は、唐・房琯のこと（次律はその字）。『新唐書』巻一三九に伝がある。潁陽は、唐・邢和璞のこと。『潁陽書』を著した（『新唐書』巻二〇四）。房琯は邢和璞に自分の行く末を問うたところ、邢は「若し東南由り来たらば、西北に止まり、禄命卒わらん。降魄の処、館に非ず寺に非ず、途に非ず署に非ず、病は魚飧に起こり、亀茲板に休わん」と答えた。房琯は後に袁州（江西省）から漢州（四川省）に除せられ、辞職して閬州（四川省）に至った。紫微宮に宿をとると、大工が珍しい木目の材木を扱っており、数か月前に或る商人より亀茲（西域の国名）産の板の寄進があったので、屋根の材にするとのことであった。房琯はそこで邢の言を思い出したが、しばらくして閬州刺史から鱠の膳の招待を受けたので、「邢君は、神人なり」と嘆じて刺史に経緯を話し、棺材に亀茲板を用いるよう頼んで、鱠を食して病んで亡くなったという（『酉陽雑俎』巻二）。５６〇王烈・叔夜二句　王烈は、神仙の名。邯鄲の人で、三三八歳になっても若者のような容貌をしており、険阻な山を飛ぶように歩いたという（『太平広記』巻九に引く『神仙伝』）。叔夜は、魏の嵇康のこと。叔夜はその字。「戯れに賈粱道の詩を作る」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五一八頁）を参照。二人の関係については、以下の二句の注を参照。７８〇独見・遽餐二句　嵇康は王烈を敬愛して彼に従って学び、山に遊んだり薬物を採集したりした。あるとき王烈が独り太行山に入ると、にわかに山の東側が崩れて雷鳴のような音がとどろいた。行ってみると、山石が数百丈にわたって裂けており、両側は悉く青い石で、石に開いた穴から青い泥が「髓の如く」流れ出ていた。王烈が泥を手に取って丸めてみると、熱した蠟のように徐々に固まって石になった。匂いは糯米に似て、嚙んでみてもそのような味がした。烈は桃の実ほどの大きさのものを数個作り、持ち帰って嵇康に見せると、すでに青い石になっていて、叩くと銅のような音色がした。嵇康がすぐに王烈と見に行くと、裂けた山は元通りになってしまっていた。また、王烈が河東の抱犢山に入ったとき、石室の中で『素書』二巻を見つけたが、その字が読めなかったので、数十字を憶えて帰り嵇康に見せたところ、嵇康はそれらを悉く読んだ。喜んだ王烈は、嵇康を連れて再び石室に行こうとしたが、近くまで来るとその在りかが分からなくなっていたので、弟子に対して「叔夜が未だ合に道を得べからざるが故なり」とささやいた。これに関して『神仙経』には「神山は五百年にして輒ち開け、其の中よ

り石髓出ず。得て之を服すれば、寿　天と相畢わる」との記述があり、先に王烈が見た『素書』は、その書であったという（『太平広記』巻九に引く『神仙伝』）。以上の四句は、王烈を姚丹元に、嵇康を蘇軾に喩え、王烈のように嵇康を伴わず「独り」行動や修行をせぬよう、丹元への戒めとしたもの。9○至道　道家思想で、この上ない精妙な道。『荘子』在宥篇に、「至道の精は、窈窈冥冥たり。至道の極は、昏昏默默たり」とある。○聴瑩　聴いて疑い惑うこと。『荘子』斉物論篇に、「是れ黄帝の聴きて瑩う所なり。而るに丘や、何ぞ以て之を知るに足らん」とある。10○麤才　浅はかで才能がないこと。麤は粗に同じ。○蹶張　弩の弦を足でふんばって張ること。また、その兵士。『史記』申屠嘉伝に、「申屠丞相嘉は、梁の人なり。材官蹶張を以て、高帝に従って項籍を撃ち、遷りて隊率と為る」とあり、集解に如淳を引いて、「材官の力多きや、能く脚もて強弩を踏みて之を張る、故に蹶張と曰う。律に蹶張士有り」とある。12○幅巾　ひとはばの布で作った頭巾。冠をつけずにこれをかぶるのは、くつろいだ様子をあらわす。「劉道原が南康に帰覲するを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊六四頁）を参照。13○苦誓　心より誓う。切実に誓う。晉の王羲之が辞職するとき、父母の墓前で誓いを立てたことに対し、朝廷は「其の誓いの苦ろなるを以て、亦た復た之を徵さず」という（『晉書』王羲之伝）。○黄壤　黄色い大地をいうが、ここでは黄泉、すなわち死者のおもむくところの意。『三国志』呉書・孫皓伝に、「惟だ信納を垂れ、以て元元を済え」とあり、裴松之注に『江表伝』を引いて、「天　呉を亡ぼすに匪ず、孤が招く所なり。黄壤に瞑目して、当に復た何の顔ありてか四帝に見ゆべけんや」とある。14○要言　適切で重要なことば。枚乗「七発」（『文選』巻三四）に、「今、太子の病　薬石・針刺・灸もて療すこと無かる可き而已。要言・妙道を以て説き去る可きなり」とある。○青琅　青色の美しい石。『爾雅』釈地に、「西北の美なる者、崑崙の虚（墟）の璆・琳・琅玕有り」とあり、郭璞の注に、「琅玕は、状は珠に似たり」とある。石欄干、石珠、青珠などの異称がある（『本草綱目』巻八）。以上の二句について一韓智翊は、「言フココロハ、縦ヒ死ニ至ルトモ、志ヲ変フ可カラザルナリ。其ノ誓約ノ言、以テ金石ニ銘ス可キナリ」（『四河入海』巻一九の三）と記す。15○蓬萊　渤海にあるとされた神仙の住む山。蓬萊山。「常山の絶頂の広麗亭に登る」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊九六頁）を参照。16○弱水　蓬萊山をめぐって流れるという川の名。『続仙伝』巻上「謝自然」に、ある道人が、師

を求めて蓬萊山に行こうとする謝自然に対して、「蓬萊は弱水を隔つ。此より去ること三十万里、舟楫に非ずんば行く可からず、飛仙に非ずんば到る莫し」と言ったとある。弱水の名は、鳳麟洲をめぐる川として『海内十洲記』にみえる。17 18○且当・聊復二句　嵇・阮、山・王は、いわゆる竹林の七賢に数えられる嵇康、阮籍、山濤、王戎のこと。このうち、尚書僕射、侍中などを歴任した山濤と、尚書左僕射、司徒などを歴任した王戎とは、俗物とされることがある。『世説新語』排調篇には、飲酒の席に遅れてきた王戎に対して阮籍が、「俗物已に復た来たりて人意を敗る」と言った話があり、また山濤は吏部の職を去るに際して嵇康を推挙しようとしたが、嵇康は山濤に「山巨源に与えて交わりを絶つ書」（『文選』巻四三）を寄せて絶交した。時くだって宋・顔延之は、七賢のうち五人を選んで「五君詠」（『文選』巻二一）を詠じたが、これに関して『宋書』顔延之伝には、「山濤・王戎は貴顕を以て黜けらる」とある。特に18句の山・王については、このとき高位に在った蘇軾自身の立場を意識してかくいう。19○達人　道理をわきまえた人。「次韻して章伝の贈らるるに答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊四六八頁）を参照。○四海　四方の海の内。天下。『論語』顔淵篇に、「四海の内、皆な兄弟なり」とある。20○曲士　見識のせまい人。一曲の士。『荘子』秋水篇に、「曲士は以て道を語る可からざる者は、教えに束らるればなり」とある。○一疆　一箇所。一部分。蘇軾以前に用例を見ない。21 22○慎勿・児童二句　『荘子』列御寇篇に、「夫れ内誠にして解（懈）らざれば、形諜らかにして光を成す。以て外　人の心を鎮むれば、人をして老を貴ぶことを軽んぜしめて、其の患うる所を鰲（齎）さん」とある。形諜は、身体が安らかでくつろいでいること。それによって周囲に輝きを放つのが「光を成す」である。児童は、いまだ道を得ていない未熟者のことで、蘇軾自身をも含む。一韓智翊は、「カマイテ形容ヲシテ奇特ヲ現シテ、放光ナンドシテ、何ヲモ知ラザル児童ノ如キ者ヲ驚カスルナト云（フ）ゾ」と記す。二句は、姚丹元に対する些かのからかいの意を含むかと思える。

劉更生（向）が、御物の制作所で黄金を鋳造させた術を学ぼうというのではありません。房次律（珺）のように、自身の行く末を潁陽（邢和璞）に尋ねようとも思いません。

王烈はどういう料簡を持っていたのか。（彼が付き従った）叔夜だってすばらしい器量を持っていたのに（それにふさわしい扱いをしなかったのだ）。神山が裂けているのを独り見つけて。香り立つその石の髄をあっという間に食べてしまったではないか。このうえない道は微妙で明らかにしがたいものなのに、私の才能は弩（いしゆみ）を踏み押さえるのが精々の武骨さ（で、まだ道を教わっていないままだ）。

すると先生は喜び笑って、頭巾すがたで我が屋敷に来られ、黄泉を指さしてきびしく誓われた。その誓言をしかと青玉に刻みつけておくことにしよう。

蓬萊山はいずことも知れず、その前に横たわる弱水をただ望むばかりです。まずは嵇康・阮籍と交わることにして、とりあえず山濤・王戎も仲間に加えることにしましょう。達人は天下のすべての者を友とし、小人は自分の縄張りに固執するとか。くれぐれもそのお姿が輝きを放つようになっては困ります。もし暗闇に光り輝けば、（私ども）道を得ぬ青二才たちが驚くことになりましょうから。

（担当　西岡　淳）

三九